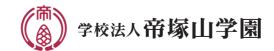
平成28年度

学校評価報告書 帝塚山小学校



ELEMENTARY SCHOOL



平成 28 年度学校評価について

帝塚山小学校は、平成 28 年度の教育活動及びその他の学校運営の状況について、学校 評価を実施しました。

学校評価は、本校児童とその保護者を対象とした各アンケート結果、育友会等との懇談会で寄せられた御意見等を活用のうえ自ら評価を行い、さらにその結果について学校関係者による評価を行いました。

このたびの結果を踏まえ、更なる教育水準の向上を目指して、教育活動及び学校運営の改善工夫に組織をあげて継続的に取り組んでいく所存です。

帝塚山小学校 校長 池田 節

1. 総括

学園の建学理念	「国家・社会の負託に応える有為の人材を育成する」							
本校の重点目標	[人間力の基	礎づくりと21世紀型スキルの育成」						
(教育目標)	"「子ども	らの根っこを鍛える」教育をめざす'	,					
前年度の成果と課題	[成果] 特色ある教育として、プログラミング、ロボット教育を位置づけることができた。また、英語集中プログラムを実施し、国内留学の定着を図った。さらに広報活動ではホームページの充実を図り、体験入学や説明会で教育の独自性をアピールし、出願者を増加させることができた。							
	[課題] 「倫理観のある子ども・豊かな感性を持つ子ども・強い精神力と体を持つ子ども・高い英知と学力を持つ子どもの育成」という教育目標で前年度まで教育活動行ってきたが、時代の流れと保護者の訴求に応えるべきより具体的な教育目標、点目標を設定し、職員の共通理解を図りたい。							
本年度の重点目	標	具体的目標	総合評価					
1. 「根っこを鍛える」教育目標の 具現化		① 教育目標の徹底② 「考える子ども」の育成③ 「心を磨き共感力を高める」活動の充実④ 「本物にふれ可能性をひろげる」会」実践の推進	A 教育目標(「根っこを鍛える」) と教育の3つの柱(「考える子ど も」の育成、「心を磨き共感力を高 める」活動の充実、「本物にふれ可					
2. 特色ある教育の推進拡充		① ICT教育の推進 ② 国際理解教育の充実 ③ 学園各学校園との連携強化	能性をひろげる」実践の推進)について学内外に明確に発信したことにより、近隣競合校に対して本校教育の特長を鮮明にすることができた。 ICT教育と英語教育において先進的な取り組みを行い、積極的に発信することができた。 学園各党園はよりの教育連携の輪を扱った。					
3. 教員の意識改革・行動改革推進		 学校リスクの対策強化 研究・研修の推進 財政健全化策の強化 学校評価の実質化 教員評価の実施推進 	げ、総合学園としての優位性を明確にすることができた。 安全、防災、通信領域において、学校リスク対策をさらに強化することができ集活動については、外部からの出願者が79名に達し、内部進学者25名を含めると4年連続100名を上回る出願者があった。					
4. 児童募集活動の強化	;	① 広報活動の組織的展開 ② 募集行事の充実 ③ 教育内容の独自性発信	一方、併設の帝塚山幼稚園からの内部進学率は75.7%であり、今後さらに教育連携を深め、進学率の向上に努める。帝塚山中学校への進学率が62.8%に達し、内部進学推薦制度の充実を図ることができた。					

2.-① 自己評価(教育活動に関するもの)

	評価項目	具体的目標・方策及び評価指標 ※()内は評価指標		己価	評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
教育	教育目標の教職員におけ る共有化	年度初め及び各学期に、教育目標を説明し、全教職員に共有させる。	A	А	教育目標の周知を図った他、各学期末合計3回の職員会議で総括及び改善案の提示等を通じて、更なる教職員の理解深化を図った。	教育目標の今日的意義と 必然性を分かりやすく説 明する。
標	教育目標に対する保護者 の理解促進	学校教育目標を保護者に説明 し、理解していただく。(複数 回実施)	A	^	4月の全学年保護者会に加え、各学期合計3回の学級懇談で繰り返し教育目標を説明し理解を得た。	「学校だより」「校長室 だより」でもより積極的 に発信していく。
	アクティブ・ラーニング の推進	「主体的・協働・深化」を意識 した授業に関する研修会を実施 し、実践する。 (複数回実施)	В		「主体的・協働・深化」を意識した授業に関する研修会を合計3回実施した。研修内容を生かし、各教科で試行錯誤しながらアクティブ・ラーニングの実践を試みた。	「深い学び」に至るまで の過程の研究が必要であ る。
	課題解決学習の推進	自らの問いを大切にした学習活動に関する研修会を実施し、実際に展開する。(1回以上実施)	A		アクティブラーニングと課題解決学習を融合した授業形態に関する研究会を年3回実施した。	さらに各教科で推進して いく必要がある。
教科指導	学習内容の精選	学びの深化を目指した内容や教 材に関する検討会を開催する。	A	Α	検討会を重ね、学びの深化と進学への対策と の両面で教材を選択した。	限られた時間で学習効果 を上げる教材の模索を今 後も継続する。
	指導方法の工夫改善	全教員が、ICTの活用や教材を工夫し、子どもの意欲を高める授業に心がけている。	A		多くの教員が新しく導入した児童用タブレット端末を活用した授業を実施した。児童の授 業満足度は高かった。	
	「読む」「書く」活動重 視	授業で「読む」、「書く」活動 を積極的に取り入れる。	A		課題解決学習の過程で自分の考えを書き綴る 活動を重視した。	アクティブラーニングの 授業に読む書く活動をど う取り込むかが課題であ る。
	「道徳」の充実	教科化に向けて、本校独自のカリキュラムのもとでの授業を毎週実施する。	В		教科化に向け、道徳教材を開発するととも に、外部講師を招き、研究授業や授業の進め 方の研修会を開催し教員の共通理解を図っ た。	学校重点目標に即した授 業のあり方の研究が必要 である。
	人権教育の充実	人権委員会主導のもと、道徳教育との関連を考慮した取り組み を進める。	A		道徳カリキュラムに人権集会を位置づけることができた。	今後はその年の道徳学校 重点目標に即した人権教 育の推進が必要である。
	学校行事の活性化	各行事の目標を明らかにし、P DCAサイクルを重視する。	A		各行事終了後にアンケート実施を励行した。 それぞれの改善点を明らかにしたうえで、次 年度へ確実に申し送りした。	学校行事の活性化ととも に、合理化スリム化を実 施する。
特別活動・	児童会活動の活性化	学校委員や学級委員が主体的に 取り組む活動を推進する。	A		児童の意欲を重視した企画運営を図ったことにより、児童の趣向を反映した活動に取り組むことができた。	児童の主体性を重視した 児童会活動になるよう内 容の検討等が必要であ る。
道徳教育	特別活動の充実	全校集会(月1回)、講演会 (学期1回)、掃除(毎日)な ど「心を磨く」活動を推進す る。	Α	Α	全校集会を月1回、外部講師講演会を合計3回の他、掃除ボランティアを継続実施した。	トイレのスリッパを揃え る運動の徹底を推進す る。
・人権教育	体験合宿の充実	各学年の合宿における体験活動 を、独自性と系統性を重視して 実施する。	A		9月までに系統性のある全学年での合宿を実施した他、高学年スキー教室など、独自性のある体験合宿を実施した。	本校の体験合宿の意義を さらに外部に広報してい く。
	体験学習の推進	授業での探求活動において、現 場主義、実践主義を重視する。	A		5年生ダイハツ出張授業、6年生琵琶湖博物館実習の実施を定着させた。	今後、さらに外部講師出 張授業を充実していく。
	クラブ活動の活性化	より高度な目標のもと、主体的 で意欲的な活動を推進する。	В		課外活動では、参加行事を精選し、取り組ん だ。	課外活動での教員の負荷 を注視していく。
	自主参加体験活動の推進	土曜教室や長期休業中の体験活動などを、積極的計画的に実施する。昨年度以上の参加率を目指す。	A		児童の参加意欲が高く、ほぼ全児童が参加したことにより、全体に活気のある活動が実施できた。	今後、本校の特徴的な教育活動として位置づけていく。

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※()内は評価指標	自己評価		評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
	授業におけるICT活用	電子黒板、プロジェクター、書 画カメラ、タブレット端末等を 効果的に授業で利用する。(授 業実施内容)	Α		電子黒板、プロジェクター、書画カメラを各 教室で高頻度で活用した。また、教師用タブ レット端末、児童用タブレット端末を用いて の教育を展開した。	児童用タブレット端末の 効果的な活用をさらに推 進していく。
	ICT教育の推進	タブレット端末や学習ソフトな どの活用についての研修を実施 する。	A		児童用タブレット端末の活用例について研修 会を実施し、ICTを用いた教育を推進し た。	児童用タブレット端末の 効果的な活用をさらに推 進していく。
I C T 教育	「情報」授業の充実	先進的な授業内容が展開できる ようカリキュラムを作成する。	A		次年度からの全学年カリキュラムが完成し、 職員で共有した。	プログラミングの情報科 での位置づけを明確にさ せていく。
	プログラミング教育の推進	2020年の必修化に向けて、先進 的な活動を展開する。	A		プログラミング教育は、高学年での全面実施に加え、低学年でも試行的に実施した。次年度からの全学年実施に目途をつけた。	次年度から、全学年で実 施推進していく方向で検 討する。
	ロボット教育の推進	プログラミング教育の発展として、先進的な活動を展開する。	A		ロボット教室への参加希望者が多数となり、 機材を増やすなど体制を拡充のうえ実施し た。	次年度から、5、6年全 員で実施推進することを 目指す。
国	「英語」授業の充実	2020年の必修化に向けて、先進 的な活動を展開している。	В		毎朝のモジュール学習教材の開発選定を行い、充実を図った。	本校独自の効果的な指導 カリキュラムを確立する 必要がある。
際理解教育	「国内留学」の推進	「話す」「聴く」力の向上に向 けて、効果的な学習内容を導入 する。	A	В	国内留学を継続実施するとともに、3年生と 4年生との内容に段階をもたせる検討を行った。	他校に誇れる独自の効果 的内容をさらに検討すべ きである。
目	海外姉妹校との交流	国際理解委員会を中心に、昨年 度より豊かな交流を実現する。	В		複数の交流校に作品を送り、返事の手紙を紹介した。	スカイプを利用するな ど、効果的な交流方法を 検討する必要がある。
教員	教員自己評価表の作成	教員自己評価表の作成にあたっ ては、より具体的な項目とし、 各自の努力目標の達成を目指 す。	В	В	学期末の個別面談で各自の努力目標と今後の 課題について確認した。	今後は文章化に向けての 検討が必要である。
価	自己評価の目的の徹底	教員自己評価が、各自の指導力 向上を目的としていることを徹 底するため個人面談を複数回実 施する。(1回実施)	В	Б	各自の資質向上を目指した面談を7月と3月 実施した。	さらに個別面談の内容を 充実させていく必要があ る。
	幼稚園との連携交流	体験入学や幼小合同行事、畑で の収穫など園児との交流を積極 的に図る。(2件実施)	A		帝塚山幼稚園年長組と5年生のいもほり交流 等の連携行事を3件実施し、教育連携を深め た。	年中、年少児との交流を 具体的に検討する必要が ある。
教育法	中高との連携交流	ペットボトルロケット交流、バスケット部や吹奏楽部、ロボット部での交流など、様々な交流活動を進める。(2件実施)	A		ペットボトルロケット交流、バスケット部や 吹奏楽部、ロボット部での交流に加え、卒業 生からの交流提案のあったバザーでの理科実 験を取り入れるなど、帝塚山中学校高等学校 との連携交流を実行した。	が、連携を広げるきっか
連携・内部進学	大学との連携交流	帝塚山大学現代生活学部こども 学科、食物栄養学科、経営学 部、サークルなどと様々な交流 活動を進める。交流件数5件以 上を目指す。(2件実施)	A	А	帝塚山大学現代生活学部食物栄養学科、こども学科、経営学部、サークルなど今年度は大きく連携の輪が広がり、大いに評価できる。	今年度交流できなかった 学部・学科との連携を模 索していく。
	幼稚園からの内部進学制 度の充実	内部進学推薦制度の充実や年 長、年中体験授業の推進など、 円滑な接続に努める。(内部進 学率80%以上)	В		帝塚山幼稚園からの内部進学率は75.7%であた。公立小学校への入学を希望されたこともあり、内部進学率は伸び悩んだ結果となった。	アフタースクール制度の 整備が急務である。
	中学校への内部進学指導の充実	内部進学推薦制度の充実や6 年、5年体験授業の推進など、 円滑な接続に努める。(内部進 学合格率60%以上)	Α		帝塚山中学校への内部進学率は62.8%で、昨 年度実績を上回った。	今後は推薦判定のあり方 について、さらに優位性 を高める必要がある。

評価は4段階【A:十分である(よくできた)、B:ほぼ十分である(できた)、C:あまり十分でない(あまりできなかった)、D:改善を要する(できなかった)】

2.-② 自己評価 (学校経営に関するもの)

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※ () 内は評価指標	自己評価		評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
	学校安全計画の充実	児童の安全教育の充実を図るため、安全教育に関する職員研修会を行う。(複数回実施)	A		危機管理に関する情報提供と共通理解を図る 研修を年3回実施した。	各合宿における安全対策 の充実を図る。
	学校保健計画の充実	児童の保健教育の充実を図るため、保健教育に関する職員研修会を行う。(複数回実施)	A		アレルギー、感染症、救急救命の職員研修を 実施した。また、保健集会など、児童対象を 対象とした啓蒙活動を適時に実施した。	
	学校防災計画の推進	現実的な抜き打ち防災訓練を計画するとともに、防災設備の充実を図る。(年10回実施)	A		月1回、年12回の抜き打ち防災訓練を実施した。児童が自主判断し、率先避難できることが十分習慣化された。	現実的な救助体制もさら に充実させていく。
組織運営・	保護者との連絡体制の充実	電話や家庭訪問、面談などによる連絡相談と2種類のメールに よる緊急連絡体制を整備する。	A		メールでの連絡に加え、必要に応じて家庭訪問を行うなど、きめ細やかな連絡に注力した。	文書とメールの双方の特性を考慮して発信する必要がある。
安全管理	学校カウンセリングの充 実	児童・保護者・職員対象のカウンセリングを定期的に実施する。	A	А	専属カウンセラーによるカウンセリングを定期的に実施するとともに、帝塚山大学「こころのケアセンター」への相談斡旋も積極的に実施した。	専属カウンセラーとここ ろのケアセンターの双方 を効果的に活用する。
・保健管理	情報管理の徹底	公文書や個人情報データを適正 に保護、管理している。(外部 流出ゼロ)	A		パソコンやタブレット端末の校外持ち出し規 定を整備するなど情報管理を徹底した。学校 内部情報の外部流出は皆無であった。	児童成績などのデータ ベース化に備えて、管理 の徹底を図る。
	施設・設備の安全管理	生活指導部、保健体育部により、施設設備の安全点検を実施する。 (複数回実施)	A		年3回の定期的な施設設備の安全点検に加え、学期終了時に営繕必要箇所を点検し、安全安心の実現に努めた。	安全管理と予算との関係に課題がある。
	職員のメンタルヘルスの 推進	管理職と教職員相互の連絡、報告、相談が円滑に行われ、健全 な職場環境が保障されている。	A		全教員参加のメンタルヘルスに関する研修会を開催するとともに、適宜、 個別面談などを通じて職員の健康管理を図った。	
	関係機関との連携	学校医や市・県の関係機関との 連絡、相談体制を整備する。	A		市や県と子育てや虐待、DVなどの案件で連携を図った。	今後も関係機関に情報提 供をしていく必要があ る。
	研究の組織・計画・実施	研究主題に沿った校内研究が計画的、効果的に進められている。	A	- A	全教員が計画通りに独自の研究テーマを追究 することができた。	次年度は研究主題をさらに絞り込む必要がある。
研究・	校内研修の実施	目的に沿った校内研修を実施 し、その成果が確実に教育実践 の場に生かされている。(1回 以上実施)	A		ICT研修、保健研修、道徳研修、救急研修、水泳研修を実施するとともに、教育実践した。	今後も必要性に応じ、現 場ですぐに生かせる研修 を実施していく。
· 研 修	校内研究の充実	様々な形態の研究が進められ、 個々の教員の実践指導力につな がっている。	A		事前研修、事後研修を実施し、活発な討議を行った。	より効果的な校内研究の 方向性を模索する。
	校外研究会への参加	自主的・積極的に参加した校外 研究会の成果を校内で生かす。	A		全教員が私立小学校連合会主催の研究会に参加した他、外部の様々な研究会に率先して参加研修して教育力の向上に努めた。	
	広報部、管理職の役割分 担	広報部員、管理職がそれぞれ適 切な役割分担を行って、効果的 な広報活動を展開する。	A		広報部員、管理職が中心となり、広報書類、 ホームページ作成、説明会立案など効果的に 展開した。	広報部員を毎年循環し、 職員の意識の向上に努め る。
募集活動	広報部会の開催	広報部会を開催し、広報戦略に ついて議論を深めている。 (複 数回実施)	A	А	広報部会を年6回開催し、常に周囲の状況を 考慮した広報戦略の立案に努めた。	出遅れがないよう、今後 も周到な準備が必要であ る。
	ホームページの充実	ホームページでの教育内容紹介、募集行事発信、ニュースアンドトピックスの毎日更新など、ネットによる効果的な広報活動を展開する。(週1回以上発信)	A		保護者、受験者、マスコミ等の受信者を意識したうえ、発信内容を吟味するとともに、ほぼ毎日ニュースを発信した。特に、ニュース&トピックスの更新件数は196件に達した。	広報活動の中心的役割と して、益々充実させてい く必要がある。

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※()内は評価指標		己価	評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
	募集活動の積極的展開	幼児教室・幼稚園の訪問、外部 説明会・外部子育て講演会の開 催、ダイレクトメールの発送な ど積極的な募集活動を展開して いる。募集定員充足を必達す る。(入学者数)	A		内部進学説明会と外部説明会の相乗効果がみられ、志願者を増やし、入学定員を充足させた。特に、志願者における専願者の率が増加した。	外部講演会を展開できる スタッフの養成が今後必 要である。
	入学説明会の充実	全クラス授業公開や児童発表な ど、本校独自の内容で魅力を発 信する。(参加者数延べ150名)	A		昨年度を上回る延べ200名の参加者を得ることができ、出願につなげることができた。	入試日程の早期化に伴い、次年度は日程を検討する必要がある。
募集	体験入学の充実	全8コースの体験授業を用意 し、それぞれに高学年児童が付 き添う本校独自の内容を展開す る(昨年度以上の参加者数)	A	Α	児童付き添いと独自の体験内容で他校との差別化を図った。参加者数はそれぞれの体験で 昨年度を上回った。	
活動	「不易流行」の重視	保護者の期待する先進的な教育 内容と、普遍的で伝統的な価値 観に基づく教育内容の両立を目 指した本校の特長を意識して発 信する(HP更新)	A		「流行」部分の鮮明化に加え、年間を通じて「不易」教育の重要性もホームページ等を通じてアピールすることができた。	
	近隣競合校との差別化	本校教育の特長について、他校 と明確に差別化したメリットと して発信することに努力する (HP更新)	A		プログラミング教育の導入、防災教育や教育 連携の実施等、本校の取組みが、主要新聞社 の他、NHKニュース、各種情報誌会社に取 りあげていただいた。	
	総合学園の魅力の発信	同じキャンパス内に全ての校種 が共存し、交流連携しているこ とのメリットを発信する(HP 更新)	A		併設の学校園との交流をホームページを通じて積極的に発信した。本校の魅力の一つであるとの評価を得た。	
学校評	学校評価表の作成	学校評価表の作成にあたって、 重点目標に特化し、より現実的 な項目になるよう努めている。 事業計画との連動を実現する。 (評価項目の更新)	A	А	評価項目について全面的に更新し、現実的な 内容にしたことにより、到達した目標と課題 を残した項目がより明らかになった。	次年度の改善点を明確化していく。
価	学校関係者評価委員会で の議論結果の重視	委員会での意見を十分に尊重 し、次年度での改善に努めてい る。総合評価「A」を確保す る。(総合評価「A」確保)	A		平成28年度学校関係者評価を実施し、総合評価「A」を確保した。いただいたご意見をもとに職員で改善策を検討し、平成29年度の学校運営に役立てることとした。	
学校運営	学園財政状況についての 共有化	学園財政の現状について全教職員が共通理解している。「財政健全化計画(小学校・幼稚園編)」を全教職員に配付し、徹底を図る。(「財政健全化計画(小学校・幼稚園編)」)	Α		共通理解の上に予算のスリム化についての職員の理解を得た。「財政健全化計画(小学校・幼稚園編)」に基づき、平成30年度入学者から適用する学費改定を行った。	更に深刻化する内容についてしっかり説明していく必要がある。
	学校各部予算案の立案	財政状況を理解の上、費用対効 果をふまえた適正な予算案を作 成する。	A	А	各部における削減案について賛同をえて予算案を作成した。	更に深刻化する財政状況 を十分に勘案していく必 要がある。
	経費の節減	節電や材料の節約、有効利用など、経費節減への意識を強化する。(消耗品費・広報費の10%節減)	A		職員で経費節減への共通認識をもって臨み、各教科予算は、概ね昨年度より20%節減した。	なぜ必要か、どのような 意義があるかを徹底して 検証する。

評価は4段階【A:十分である(よくできた)、B:ほぼ十分である(できた)、C:あまり十分でない(あまりできなかった)、D:改善を要する(できなかった)】

3. 学校関係者評価

意見	改善方 策
① 内部進学の項目で、幼稚園からの内部進学率では80%以上、中学校への内部進学率では60%以上という数値の違いについて、その理由を説明してほしい。	① 内部進学率に関しては、今年度は幼稚園から小学校への実績が75.7%、 小学校から中学校への実績が62.8%であり、より現実的な目標を設定し ている。中学校に関してはさらに高い進学率を目指すため、小中の連携 を今後一層深めていきたいと考えている。また、一定の学力に達してい ることが条件となっており、小学校での学力向上への努力を更に積 み重ねていきたいと考えている。
② 教育目標に共感する。日々の教育活動や様々な行事を通して人間力が鍛えられていることを、子どもの姿から実感する。 教師を信頼し心が通じ合える、教師の顔が見えるあたたかい教育環境である。また、様々な教育活動に保護者と児童が共通意識を持って関わることができ、ともに成長することができる。	② 今後も、教育目標を子どもたちや教師の姿から、保護者の方々が実感できるよう努めていきたいと考えている。
③ 評価項目で、小項目欄が多いのがきめ細やかで良い。反面、これだけ多くの小項目を達成しなければならないのは大変であると感じた。	③ 今後も、より詳細で具体的な評価で実績がイメージできるように努める。
④ 自己評価がB評定となっている項目は、変革・転換期に関わるものが多いように思う。自己評価結果は全体的に概ね適正であると考えられる。	④ 現在進行中の教育活動や、さらにPDCAサイクルによる改善が必要な項目であると認識している。
⑤ 公立の学校ではストレスや過重労働から健康面の不調を訴える 教員が増えている中、帝塚山小学校の教員は元気で生き生きとし ているように感じる。教職員の健康面の管理とメンタルヘルスの 推進が充実しているように思う。	⑤ 働き方改革を掲げ、教職員の健康面やメンタルヘルスの適正化に向けて業務の効率化と職場環境の改善を常に心がけている。